

むかし、北前きたまえの大浦おおのうらという所に、浦島太郎という漁師りよしが住んでいました。八十に近いおつ母かあとふたり暮らしてました。

ある秋のこと、毎日毎日北風がふいて、太郎は漁に行くことができませんでした。魚がとれなければお母に食べさせるにも、お金がありません。

「明日は晴れたらいいのになあ」と思いながら寝て、ふと夜中よなかに目をさますと、いつの間にかよい天気になっていました。太郎は、とび起きて、いかだ船に乗って海にこぎ出しました。ところが、東の空が明るくなるまで釣つても、魚はいつびきもかかりません。

「こまったなあ」と思っていると、お日さまがのぼったところに、大きな魚がえさに食いつきました。急いで釣りざおをあげると、魚ではなくて、かめがかかっていたました。かめは両手を船べりにもたせかけて、なかなか逃げようとしません。太郎は、

「鯛たいかと思つたら、おまえはかめじゃないか。放してやるから、早くよそへお行き」といって、かめを海の中へ放りこんでやりました。

それから、また釣り糸をたれていましたが、魚はさっぱり釣れません。こまっていると、大きな魚が食いつきました。釣りざおをあげると、こんどもまたかめでした。

「あれほどよそへ行くようにといったのに、またおまえか」

太郎は、よくよく運が悪いものだと思ひながら、かめを放してやりました。

魚を釣らないと帰ることもできないので、しんぼうして釣っていると、また何か食いつきました。今度こそ魚だろうと思つて釣りあげると、やつぱりかめでした。そこで、また放してやりました。

それから魚はなかなか釣れません。とうとうお日さまが沈しずんでしまったので、帰つておつ母にどういおうかと思ひながら、いかだ船を岸に向けてこぎだしました。すると、向こうから、渡海船とかいせんが近づいて来ました。渡海船の船頭せんとうは、太郎のいかだ船にならぶと、

「浦島さん、どうぞこっちの船に乗ってくれ。竜宮りゅうみやうの乙姫おとひめさまからのおむかえじゃ」といいました。太郎は、

「おれが竜宮へ行ってしまつたら、おつ母がひとり残るから、そんなことはできない」といいました。けれども、船頭は、

「おまえさまのおつ母さまには、何不自由させないから、この船に乗ってくれ」といいます。そこで、太郎は、船に乗りこみました。渡海船は、太郎を乗せると、水の中へもぐって行って、竜宮に着きました。

来てみると、竜宮はりっぱな御殿ごてんでした。乙姫さまが出てきて、

「さぞお腹が空いたでしょう」といって、たくさんのごちそうでもてなしてくれました。そして、

「二、三日、遊んでいってくださいな」とさそいました。太郎は、きれいな着物を着せてもらって、楽しく遊んでいるうちに、思わず三年たってしまいました。

「家では、おっ母が心配しているにちがいない。帰らなくては」と、太郎が乙姫さまにいとまごいをする
と、乙姫さまは、太郎に、三段重ねの玉手箱をくれて、

「じつは、わたしは以前あなたに釣りあげられたかめです。お別れするのはつらいですが、しかたがありません。この玉手箱をあげますから、こまり果ててとほくに暮れたときに、開けてください」といいました。太郎は、渡海船で送られて故郷に帰りました。

帰ってみると、山のようすも村のようすもすっかり変わっていました。

「三年しか留守にしなかったのに、いったいどうしたことだろう」

太郎は、考えながら、わが家に向かつて歩いて行きました。すると、一軒の家の中で、おじいさんが仕事をしているのが見えました。太郎は、入って行って、おじいさんに、

「浦島太郎という人を知っていますか」と聞いてみました。するとおじいさんは、

「そういえば、わしのじいさんがいうておったなあ。浦島太郎という人があるとき海に出て、なんぼ待っても帰って来なかったそうだ」と教えてくれました。太郎が、

「その人のおっ母はどうしました」ときくと、おじいさんは、
「ずいぶん昔のことだから、とうに死んでしまったわい」といいました。

太郎は、おじいさんにおっ母のお墓を教えてもらって行ってみました。お墓は木の葉にうずもれていました。それから、わが家へ行ってみると、家はなくなつて、庭の踏み石しか残っていませんでした。

太郎は、とほくに暮れました。そのとき、乙姫さまからもらった玉手箱を思い出しました。三段の箱の一番上のふたを取ってみると、中にはつるの羽が入っていました。もうひとつの箱を開けると、中から白い煙が立ちのぼって、太郎はおじいさんになってしまいました。最後のふたを開けると、鏡がひとつ入っていました。太郎が鏡をのぞいていると、さっきのつるの羽が太郎の背中にくっついて、太郎はつるになりました。太郎が、おっ母のお墓の周りを飛んでいると、乙姫さまが海から上がって来て、かめのすがたになりました。つるとかめは舞を舞いながらどこかへ消えていきましたとぞ。

おしまい

村上郁再話

資料『讃岐佐柳志々島昔話集』柳田国男編／三省堂